



セルフプロデュース

学生記者卒業記念コラム



走って悩んでもがいて笑った



文 & 写真 学生記者 **野村 睦** (法学部4年)

「学生はキラキラしていいわね。後悔のないようにね」。会う度、私にそう言う祖母が昨年9月に他界した。卒業を迎えるいま祖母には、後悔のない4年間でした、と伝えたい。

中学・高校と6年間続けた陸上競技。入学当初、大学では続けるつもりはなかった。大好きなサッカーの長谷部誠選手に会うため、所属先のドイツへ長期留学に行くことが夢だった。

選んだサークルは「陸上競技同好会」だった。中央大学陸上競技場に足を踏み入れたその日から、トラックに魅せられた。

木々に囲まれ、日が差し込み、頭上には空が限りなく広がっている。夜になると照明がレーンを照らし、ランナーの後ろを影が追う。かっこいい…ここで走りたい、と思った。

中央大学陸上同好会のユニホーム。思い出がいっぱい詰まっている

魅力はトラックだけではない。100人近くが所属する同好会には、今まで出会ったことのないような人がいっぱいいた。

冬眠から覚めたと、春になると練習に来る人。いつも楽しそうに競技場の周りを何十週もぐるぐる回っている人。ダイエットのためだけに走りに来る人。

中学・高校の部活動とは全く違う雰囲気に1年生の私は驚いた。短・長距離別に練習メニューは出されるが、何をやるのか、走るのか走らないのかさえ個人の自由だった。

気が向いたときに走ろう、そんな思いで同好会に入っ

た。気が付けば、同好会の練習が毎週待ち遠しく、週2回の全体練習は皆勤賞。走ることも、練習に行き、みんなと話すことも楽しかった。

マラソン挑戦で走る楽しみを知る

練習以外でも先輩や同期生と遊びに出かけた。花火をしたり、誕生日会をしたり、江の島(藤沢市)へ行ったり。テスト期間にはファミレスでみんなと徹夜で勉強することもあった。同好会が大好きだった。

それなのに、2年生の夏頃から練習へ行かない日が増えた。みんなとも遊ばないようになった。中学・高校と大会に出場し、好タイムを出すことだけを考えて練習してきた。私は、何のために練習をして、何のために走るのか。自由すぎる環境ゆえに分からなくなっていた。

練習に参加しない罪悪感、引け目から同好会のメンバーと距離を置くようになった。寂しかった。1人でジョグへ行ったり、小さな大会に出場したりもした。走る楽しさは前ほど感じられず、走る回数はどんどん減っていった。

私を同好会に引き戻してくれたのは、3年生の秋である。中国で行われる泰山国際マラソンへ、チームでの出場が決まった。

5キロと短い距離ではあったが、大学入学後、自身初のロードレース、しかも外国だ。沿道からのやまない声援を背に、時に初対面のランナーと声を掛け合いながら走るの、すごく楽しかった。

何かが私の中で楽になった。ただタイムのために走るのではなく、陸上競技にはこんな楽しみ方があるのだと初めて知った。

同好会でたわいない話をする時間は久しぶりで懐かしく、一緒に笑えることが何よりうれしかった。それからは、少しずつ同好会に行く回数も、走る回数も増えた。

4年生になり、周りの人たちから刺激を受けて、フルマラソンやハーフマラソンに挑戦するようになった。

新しい地を走ることが、ただただ楽しい。時間が許す限り、みんなと遊び、走りに出かけるようになった。

残された練習回数は、指を折るほど少なくなっていた。友達のような後輩、4年間を共に過ごしてきた同期生、大好きだった中大トラックとの別れが近づいてきた。

ドイツ留学は叶わなかったが、今の私には後悔はない。走って、悩んで、もがいて、みんなと笑って、それだけで十分すぎる4年間であった。

私をたくさんの人と出会うせ、挑戦させて、成長させてくれた大切な場所。それが陸上競技同好会だった。

卒業するのは寂しい。でも、やり残したことはもう何もない。前を向いて進もう。また会う日まで。



学生記者になりませんか?

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在生を对象に学生記者を募集しています。

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

【お申し込み・お問い合わせ】

中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当:久保田茂信 Phone:042-674-2048(直通) E-mail:hc@tamajs.chuo-u.ac.jp